
とある魔術と科学の交差

red star

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術と科学の交差

【Nコード】

N3958W

【作者名】

red star

【あらすじ】

人には過ぎた力を持ってしまった男。御剣神哉。みつるぎのかみ

「人間には器というモノがあるんです。例えば、人間はおちよこサイズの力までしか行使できない。でも天使はどんぶりサイズの力を行使できる。」

しかも神は給食の大鍋くらいのを行使できる。全てに上限がある。体術はここまですが人間の限界。魔術も、頭脳も…。だけど僕にはその上限が無い。だから『死』も来ないんです」

この男はアレイスターの友であり師である男。
この男が、行動を開始するとき、魔術と科学は交差する――！

魔術師と魔術師

上条は補習から帰ってきて戸惑った。

朝、ベランダに干されていた（本人いわく、追われていて飛び移ろうとしたら失敗した）

インデックスという不思議少女が空腹でぶっ倒れていた。

……と思ったら空腹なんて軽いもんじゃなかった。よく見てみるとそれは…

インデックスが血だまりの中に沈んでいる事に気づいた。

「……、あ……？」

最初に感じたのは、むしろ驚きよりも戸惑いだった。

たむろする清掃ロボットの陰になっていて見えなかったのだ。うつ伏せに倒れたインデックスの背中——ほとんど腰に近い辺りが、真横に一閃いっせんされている。

まるで定規とカッターナイフを使って段ボールへ一直線に切り込みを入れたような刃物の傷。

腰まである長い銀髪の毛先は綺麗きれいに切り揃そろえられ、その銀髪も傷口から溢あふれ出す赤色に染め上げられていく。

上条は一瞬、それを『人間の血液』と認識する事ができなかった。

「や、……めろ。やめろっ！ くそー！」

ようやく上条の目が現実にピントを合わせた。重傷のインデックスに群がる清掃ロボットに慌つかてて掴みかかる。盗難防止のため無駄に重たい清掃ロボットは馬力もあって、なかなか引き剥はがす事ができない。

神様でも殺せる男のくせに。

こんなオモチャをどかす事さえ、できない。

インデックスは何も言わない。

血の気を失って紫色になった唇は、呼吸しているかどうかさえ怪しいほどに動かなかった。

「くそ、くそっ!!」混乱した上条は思わず叫んでいた。

「何だよ、一体何なんだよこれは!？」ふざけやがって、一体このどいつにやられたんだ、お前!!」

「うん？ 僕達『魔術師』だけど？」

だから———だからこそ、背後からかかった声は、インデックスのものではない。

殴りかかるように上条は体ごと振り返る。エレベーター……ではない。

その横にある非常階段から、男はやってきたようだった。

白人の男は二メートル近い長身だった。

神父と呼ぶにも、不良と呼ぶにも奇妙な男。

上条が最初に感じたのは、『恐怖』でもなければ『怒り』でもない。

『戸惑い』と『不安』。まるで言葉も分からない異国でサイフを盗まれたような、絶望的な孤独感。じりじりと、体の中へ広がる氷の触手のような感覚に心臓は凍り、上条は思い至る。

これが、魔術師。

ここは、魔術師という違うモノが存在してしまう、一つの『異世界』と化していた。

「安心してください」

そう聞こえる。上条の相当後ろから声がかかる。

「まるで虚空から現れるように来たね。空間移動能力者かい？」
テレポーター

「いいえ、違いますよ。そんなことより早くけが人を治療しないと」

と言つて声は上条の方に近づいてくる。

「あんたは誰だ？」

思わず聞いてしまう。

「16歳の健全なオトコノコです」

なんか馬鹿にされた気分。そんなことより何をしに来たのだろう。そうと思つた矢先に男はインデックスの傷口に触れていた。そして男は言葉を紡ぐ。

「我は紡ぐ、癒しの言霊^{ことだま}を。傷つき倒れた兵^{つわもの}へ、病に伏した才女へと。『快復^{ヒール}』」

すると、みるみる傷は癒えていった。まるで何事も無かつたように戻つた。

「何者だい？君は。見たところ今のは魔術だつたけど」

「さあ？何者でしょう？」

なんて会話をしている。

「気を付けてください。彼が狙っているのは10万3000冊の魔導書ですからね」

そんな事を言つたつて、インデックスは一冊の本も持っていない。

あんな体のラインがはつきり見える修道服なら服の下に隠したつて分かるはずだ。

大体、一〇万冊もの本を抱えて人が歩けるはずがない。

一〇万冊つて……それは図書館一つ分もあるんだから。

「ちよつと待つてくれ！そんなもん、一体どこにあるつて言つんだ！？」

「あるさ。ソレの記憶^{あたま}の中に」

サラリと。魔術師は当然のように答えた。

「完全記憶能力、つて言葉は知つてるかな？ 何でも、『一度見たものを一瞬で覚えて、一字一句を永遠に記憶し続ける能力』だそうだよ。簡単に言えば人間スキャナだね」

魔術師はつまらなそうに笑い、

「これは僕達^{オカルト}みたいな魔術でも君達^{SF}みたいな超能力でもなく、単な

る体質らしいけど。彼女の頭はね、これら世界各地に封印され持ち出す事のできない『魔導書』を、その目で盗み出し保管している『魔道図書館』って訳なのさ」

「ま、彼女自身は魔力を練^ねる力がないから無害なんだけど」

魔術師は愉快げに口の端の煙草を揺らし、

「そんな安全装置^{ストッパー}を用意する辺り、『教会』にもいろいろ考えがあるんだろうね。まあ魔術師の僕には関係ないけど。とにかくその一〇万三〇〇〇冊は少々危険な代物なんだ。だから、使える連中に連れ去られる前にこうして僕達が保護しにやってきた、って訳さ」
けど、と魔術師は言葉を切って

「魔術師がいるみたいだから先にそっちをやることにするよ。そっちの方が厄介だしね。それに魔術師が相手なら遠慮なく本気を出せる」

そして言う。

「ステイル」マグヌスと名乗りたい所だけど、ここはFortis 931と言っておこうかな」

「それじゃあ僕も、felicitas001と言っておきます」
詠唱を始める。

「——世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ」
^{イノケンティウス}
「魔女狩りの王ですか。確かに強い、でも——詠唱が遅いのがネックですね」

そう言っ指を鳴らすと男の眼の前に炎が噴き出る。

そして彼は凜とした、響かせるような声音で言霊を紡ぐ。

「我が喚^よびかけに応^{こた}えよ！！^{イノケンティウス}魔女狩りの王ッ！！」

噴き出た炎が炎の塊になっている。それはただの炎の塊ではなかった。

真紅に燃え盛る炎の中で、重油のような黒くドロドロしたモノが『芯^{しん}』になっている。

それは人間のカタチをしていた。

その名は『魔女狩りの王』^{イノケンティウス}。その意味は『必ず殺す』。

「なっ！？魔女狩りの王が一声で！？」^{イノケンティウス}

「魔力の差ですね。どうします？僕くらいの魔力があればあと6体くらい出せますが……」

スティルは焦っていた。なぜルーンも詠唱もなしに法王級の魔術を行使できるのか。

あと6体は出せる、もしその言葉が本物なら…。

敵は大魔術師『アレイスター・クロウリ』に勝るとも劣らぬ大魔術師だ。

「10秒以内に立ち去れば、見逃しますが」

スティルは恨みを体現したような顔で去って行った。

そして、随分前から目覚めていたと思われるインデックスがむくり、と起き上がる。

「大丈夫か？インデックス。どこか痛むところとか無いか？」

「大丈夫だよ。ありがとね」

微笑みから一転してすごく真面目な顔になり、男に向かって言う。

「あなたは何者？」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

バカと昼寝男と超能力のオリキャラがとある魔術の禁書目録&とある科学の超電磁砲の
キャラを味方に引き込んでいく物語です。

聖人・神裂火織と嘘

「あなたは何者？」

インデックスはそう聞いた。

しかし、帰ってきた答えは。

「何者でしょう？じゃあそれでは」

そう言っただけで消えた。だがインデックスによると魔術は使っていないか
つたらしい

六〇〇メートルほど離れた、雑居ビルの屋上で、ステイルは双眼鏡
から目を離れた。

「禁書目録に同伴していた少年の身元を探りました。……禁書目録
は？」

ステイルはすぐ後ろまで歩いてきた女の方も振り返らずに答える。
「生きてるよ。……だが、敵側の魔術師が強すぎる。僕じゃ相手に
ならないよ」

女は無言だったが、新たな敵よりむしろ誰も死ななかった事に安
堵しているように見える。

女の歳は十八だったが、十四のステイルより頭一つ分も身長が低
かった。

もつとも、ステイルは二メートルを超す長身だ。女の身長も日本
人の平均からすればやはり高い。

腰まで届く長い黒髪をポニーテールにまとめ、腰には『令刀』と
呼ばれる日本神道の雨乞いの儀式などで使われる、長さ二メートル
以上もある日本刀が鞘に収まっている。

ただし、彼女を『日本美人』と呼ぶのは少し抵抗があるだろう。
格好は着古したジーンズに白い半袖のＴシャツ。

ジーンズは左脚の方だけなぜか太股の根元からばつさり斬られ、Tシャツは脇腹の方で余分な布を縛ってヘソが見えるようにしてあり、脚にはヒザまであるブーツ、日本刀も拳銃みたいなホルスターに挟むようにぶら下げてある。

こうして見ると西部劇の保安官が拳銃の代わりに日本刀を下げているようにも見える。

香水臭い神父姿のスタイルと同様、まともな格好とは思えなかった。

「それで、神裂。アレは一体何なんだ？」

「それですが、男の情報は特に集まっています。少なくとも魔術師や異能者といった類ではない、という事になるのでしょうか」

「何だ、もしかしてアレがただの高校生とでも言うつもりかい？」
スタイルは口に唾えて引き抜いた煙草の先を睨んだだけで火をつける。

「……やめてくれよ。僕はこれでも現存するルーン二四字を完全に解析し、新たに力ある六文字を開発した魔術師だ。そこらの魔術師が、裁きの炎を退けられるほど世界は優しく作られちゃいない」

「そうですね」神裂火織は目を細め、

「……むしろ問題なのは、アレだけの戦闘能力が『正体不明』となっている事です」

この学園都市は超能力者量産機関という裏の顔を持つ。

五行機関と呼ばれる『組織』に、スタイルや神裂——その上の『組織』は禁書目録の事を伏せるとはいえ、事前に連絡を入れて許可を取っていた。

名実ともに世界最高峰の魔術グループでさえ、敵の領域では正体を隠し続ける事は不可能と踏んだからだ。

「情報の……意図的な封鎖、かな。しかも禁書目録の傷は魔術で癒したときだ。神裂、この極東には他に魔術組織が実在するのかい？」
ここで彼らは『あの少年は五行機関とは別の組織を味方につけている』と踏んだ。

「……この街で動くとなれば、何人も五行機関のアンテナにかかるはずですが」

神裂は目を閉じて、

「敵戦力は未知数、対してこちらの増援はナシ。難しい展開ですね」
たしかにそうだ。少なくともステイルより強い魔術師であることは確定しているのだから。

「最悪、組織的な魔術戦に発展すると仮定しましょう」

「刻印をラミネート加工した。」

まるでトレーディングカードのような刻印を手品師のように取り出し、

「今度は建物のみならず、周囲二キロに渡って結界を刻む……使用枚数は十六万四〇〇〇枚、時間にして六〇時間ほどで準備を終えるよ」

現実の魔術はゲームのように呪文を唱えてハイおしまい、という訳にはいかない。

一見そう見えるだけで、裏では相当な準備が必要となる。
ステイルの炎は本来『一〇年間月明かりを溜めた銀狼の牙で……』
とかいう代物なので、これでも達人レベルの速度と言える。

詰まる所、魔術戦とは先の読み合いだ。

戦闘が始まった時点ですでに敵の結界にはまっていると考え、受け手は相手の術式を読み、逆手に取り、さらに攻め手は反撃を予測して術式を組み直す。

単純な格闘技と違い、常に変動する戦況を一〇〇手二〇〇手先まで読む所を考えると、それは『戦闘』という野蛮な言葉とは裏腹な、とてつもない頭脳戦と呼べる。

そういう意味でも、『敵の戦力は未知数』というのは魔術師にとって大きな痛手だった。

「……、楽しそうだよね」

と、不意にルーンの魔術師は双眼鏡も使わず、六〇〇メートル先を見て呟いた。

「楽しそう、本当に本当に楽しそうだ。あの子はいつでも楽しそうに生きている」

何か、重たい液体でも吐き出すように、

「……僕達は、一体いつまでアレを引き裂き続ければ良いのかな」
神裂はステイルの後ろから、六〇〇メートル先を眺める。

双眼鏡や魔術を使わなくても、視力八・〇の彼女には鮮明に見える。

何か激怒しながら少年の頭にかじりついている少女と、両手を振り回して暴れている少年の姿が窓に映っている。

「複雑な気持ちですか？」神裂は機械のように、「かつて、あの場所にいたあなたとしては」

「……、いつもの事だよ」

炎の魔術師は答える。まさしく、いつもの通りに。

おっふる♪ おっふる♪ と上条の隣で、両手に洗面器を抱えたインデックスは歌っていた

何だよそんなに気にしてたのか？正直、匂い^{にお}なんてそんな気になんねーぞ？」

「汗かいてるのが好きな人？」

「そういう意味じゃねえッ！！」

あちこち出歩けるようになった彼女の願いが風呂^{それ}だった。

そんなこんなで、洗面器を抱えて夜の道を歩く若い男女が一組。
「とうま、とうま」

人のシャツの二の腕を甘く噛み^かつつインデックスはややくぐもっ

た声で言う。

「……何だよ？」

上条は呆れたように答えた。

『そう言えば名前知らない』と言うインデックスに今朝自己紹介してから、かれこれ六万回ぐらい名前を呼ばれまくったからだ。

「何でもない。用がないのに名前が呼べるって、なんかおもしろいかも」

たったそれだけで、インデックスはまるで初めて遊園地にきた子供みたいな顔をする。

インデックスの懐き方が尋常ではない。

まあ、原因は三日前のアレだろうが……上条は嬉しいと思うより、今まであんな当たり前の言葉すらかけてもらえなかったインデックスの方に複雑な気持ちを抱いてしまう。

「お前にやデカイ風呂は衝撃的かもな。お前んトコってホテルにあるみたいな狭っ苦しいユニットバスがメジャーなんだろう？」

「んー？ ……その辺は良く分かんないかも」

インデックスは本当に良く分からないという感じで小さく首を傾げた。

「私、気がついたら一日本にいたからね。向こうの事はちよつと分からないんだよ」

それだと、『イギリス教会まで逃げ込めば安全』という言葉の方が微妙になってくる。

てつきり地元に戻るのかと思いきや、実はまだ見た事もない異国に出かける訳だ。

「あ、ううん。そういう意味じゃないんだよ」

と、インデックスは長い銀髪を左右に流すように首を振って否定した。

「私、生まれはロンドンで聖ジョージ大聖堂の中で育ってきたらしいんだよ。どうも、こっちにきたのは一年ぐらい前から、らしいんだね」

「らしい？」

上条が曖昧あいまいな言葉に思わず眉まゆをひそめた所で、

「うん。一年ぐらい前から、記憶がなくなっちゃってるからね」

インデックスは、笑っていた。

本当に、生まれて初めて遊園地にやってきた子供のように。

その笑顔が完璧だからこそ、上条には、その裏にある焦りや辛さつらが見て取れた。

「最初に路地裏で目を覚ました時は、自分の事も分からなかった。だけど、とにかく逃げなきゃって思った。昨日の晩ご飯も思い出せないのに、魔術師とか禁書目録インデックスとか必要悪ネセサリウスの教会とか、そんな知識ばかりぐるぐる回って、本当に怖かった……」

「……じゃあ。どうして記憶をなくしちゃったかも分かんねーって訳か」

うん、という答え。上条だって心理学はサッパリ分からないが、ゲームやドラマじゃ記憶喪失の原因なんて大体二つに限られてくる。記憶を失うほど頭にダメージを受けたか、心の方が耐えられない記憶を封印しているか。

「くそつたれが……」

上条は夜空を見上げて思わず呟いた。こんな女の子にそこまでする魔術師達に対する怒りもあるが、詮せんのない事とはいえ自分に対する無力感が襲ってくる。

インデックスが異常に上条を庇かばったり懐いたりする理由も分かってきた。

何も分からずに世界に放り出されて一年、ようやく会えた最初の『知り合い』がたまたま、上条だったただけだ。

上条は、それを嬉しいとは思えなかった。

なぜだか知らないが、そんな『答え』は上条をひどくイライラさせる。

「むむ？　とうま、なんか怒ってる？」

「怒ってねーよ」ギクリとしたが、上条はシラを切った。

「なんか気に障ったなら謝るかも。とうま、なにキレてるの？　思春期ちゃん？」

「……その幼児体型にだきや思春期とか聞かれたくねーよな、ホント」

「む。何なのかなそれ。やっぱり怒ってるように見えるけど。それともあれなの、とうまは怒ってるふりして私を困らせてる？　とうまのそういう所は嫌いかも」

「あんな、元から好きでもねーくせにそんな台詞吐くなよな。いくら何でもお前にそこまでラヴコメいた素敵イベントなんぞ期待しちやいねーからさ」

「……、」

「て、アレ？　……何で上目遣いで黙ってしまわれるのですか、姫？」

「……、」

超強引にギャグに持ってこうとしてもインデックスはまるで反応してくれない。

おかしい、なんか変だ。何でインデックスは胸の前で両手を組んで、上目遣いの目尻に涙が浮かびそうな傷ついたっぽい顔をして、あまつさえちよっと甘く下唇を噛んでいるんだろう？

「とうま」

はい、と上条は名前を呼ばれたのでとりあえず返事を返してみる。とてつもなく不幸な予感がした。

「だいきらい」

瞬間、上条は女の子に頭のでっぺんを丸かじりされるというレアな経験値を手に入れた。

インデックスは一人でさつさと銭湯へ向かってしまった。
一方、上条は一人でトボトボ銭湯を目指していた。
「あれ？」

何かが、おかしい。はデパートの電光掲示板の時計を見る。午後八時ジャスト。

まだまだ人が眠る時間でもないはずなのに、何だか辺りが夜の森みたいにひどく静まり返っている。

妙な、違和感。

そう言えばインデックスと一緒に歩いていた時から、誰^{だれ}ともすれ違っていないが……。

上条は首をひねりつつも、そのまま歩き続ける。

そして、大通りに出た時、かすかな違和感は明確な『異常』^{シフト}に進化した。誰もいない。

コンビニの棚に並ぶジュースみたいにずらりと並ぶ大手デパートには誰も出入りしていない。

いつも狭いと感じる歩道はやけにだだっ広く感じられ、まるで滑走路みたいな車道には車の一台も走っていない。

路上駐車してある車はそのまま乗り捨てられたように無人。まるでひどい田舎の農道でも見ているようだった。

「ステイル^{Opelia}が人払い^{ルン}の刻印を刻んでいるだけです」

ゾン、と。いきなり顔の真ん中に日本刀でも突き刺されたような、女の声。

気づけなかった。

その女は物陰^{ものかげ}に隠れていた訳でも背後から忍び寄ってきた訳でもない。

上条の行く手を遮るように、滑走路のように広い車道の真ん中に立っていた。

暗がりで見えなかったとか気がつかなかったとか、そんな次元ではない。

確かに一瞬前まで誰もいなかった。

だが、たった一度瞬きした瞬間、そこに女は立っていたのだ。

「この一帯にいる人に『何故かここには近づこうと思わない』ように集中を逸らしているだけです。多くの人は建物の中でしょう。ご心配はなさらずに」

理屈よりも体が——無意識に右手に全身の血が集まっていく。ギリギリと手首をロープで縛られるような痛みに、上条は直感的にコイツはヤバイと感じ取った。

女はTシャツに片脚だけ大胆に切ったジーンズという、まあ普通の範囲の服装ではあった。

ただし、腰から拳銃のようにぶら下げた長さ二メートル以上もの日本刀が凍える殺意を振りまいていた。刀身は鞘に収まって見えな

いが、すでに『本物』を裏付けていた。

「神浄の討魔、ですか——良い真名です」

そのくせ本人は緊張した様子を見せない。まるで世間話のような気楽さが、かえって怖い。

「……、テメエは」

「神裂火織と申します。……できれば、もう一つの名は語りたくないのですが」

「もう一つ？」

「魔法名、ですよ」

ある程度予想していたとはいえ、上条は思わず一歩後ろへ下がった。

魔法名——ステイルが魔術を使って男を襲った時に名乗った『殺し名』だ。

「——て事は何か。テメエもステイルと同じ、魔術結社とかいう連中なんだな」

「……？」神裂は一瞬だけ不審そうに眉をひそめ、
「ああ、禁書目録に聞いたのですね？」

上条は答えない。

魔術結社。一〇万三〇〇〇冊の魔道書を欲して、インデックスを
追い回す『組織』。

魔術を極め、世界の全てをねじ曲げると言われる、『魔神』と呼ば
れる人間に辿り着く事を望む『集団』。

「率直に言って」神裂は片目を閉じて、「魔法名を名乗る前に、彼
女を保護したいのですが」

ゾツとした。

上条は右手という切り札を持っていながら、それでも目の前の敵に
悪寒を覚えた。

「……嫌だ、と言ったら？」

それでも、上条は言った。退く理由など、どこにもなかったから。

「仕方ありません」神裂はもう片方の目も閉じて、

「名乗ってから、彼女を保護するまで」

ドン！！ という衝撃が地震のように足元を震わせた。

まるで爆弾でも爆発したようだった。

視界の隅で、蒼い闇に覆われたはずの夜空の向こうが夕焼けのよう
なオレンジ色に焼けている。どこか遠く 何百メートルも先で、

巨大な炎が燃え広がっているのだ。

「イン、デックス……ッ！！」

敵は『組織』だ。そして上条は炎の魔術師の名前を知っている。

上条はほとんど反射的に炎の塊が爆発した方角へ目を向けようと
して、

瞬間、神裂の斬撃が襲いかかってきた。

上条と神裂の間には一〇メートルもの距離があった。
加えて、神裂の持つ刀は二メートル以上の長さがあり、

女の細腕では振り回す事はおろか鞘さやから引き抜く事さえ不可能に見えた。

――、はずだった。

なのに、次の瞬間。巨大なレーザーでも振り回したように上条の頭上スレスレの空気が引き裂かれた。驚愕きょうがくに凍る上条のすぐ後ろ―斜め右後ろにある風力発電のプロペラが、まるでバターでも切り裂くように音もなく斜めに切断されていく。

「やめてください」―〇メートル先で、声。

「私から注意を逸そらせば、辿たどる道は絶命のみです」

すでに神裂は二メートル以上ある刀を鞘さやに収めている。

あまりに速すぎて上条には刀身が空気に触れた所さえ見る事ができなかった。

「はあ、ワイヤーですか」

「なっ!?!」

神裂にすら見えない速度で上条の後ろに現れる。「あんたは……」

「はい。正義の味方の登場です」

やつぱりうぜえ。待て、今何て言った?ワイヤー?じゃああれはワイヤーでの攻撃か!

「じゃあ、神裂さんでしたっけ?あなたはこれをかわせるかなあ?」男の手の中に今まで無かった日本刀が現れる。

無駄な装飾が一切ない1.2メートル程の長刀である。

「よいしょっと」

姿がブレる。神裂の後ろの信号機が斬れた。

「まあ、無理でもいいんですけどね」

神裂が漸く口を開く。

「聖人のわたしを超える身体能力。何者ですか!?!」

「やつぱり聖人だったんですね。僕はそこらへんの魔術師ですよ」へらへらと笑いながら言う。

「それと、あらかじめいつときますが、インデックスさんが15%しか脳が使えないというのは…」

男は大きく息を吸って、努めて明るく見えるように言う。

「嘘です」

神裂は目を見開いた。

- - -
- - -
- - -

アドバイスお願いします。

聖人の涙と死闘

「う……そ？」

神裂は愕然としていた。ただ、外見に出してはいけない。表情に表わしてはいけない。

出来るだけ無表情で感情を出さずに矛盾点と不確定要素を出来る限り見つけるんだ。

それで、私たちのやってきたことが、あの子の記憶を殺し尽くす事が正しいという事を証明するんだ。

「見ず知らずの魔術師に言われたことをどう信用しろと？」

うまくできたはずだ。

「あらあら、これでも僕は勉強できる方なんですよ。それに、僕はどちらかというと科学寄りですし」

そう言うと言し始めた。

「確かに完全記憶能力はどんなゴミ記憶——去年のスーパーの特売チラシとかも忘れる事はできませんけど、別にそれで脳がパンクする事は絶対にありません。彼らは一〇〇年の記憶を墓まで抱えて持つてだけです、人間の脳は元々一四〇年分の記憶が可能ですからね」

神裂はその男の言葉をなぜか信用しようと思っってしまった。だが、不確定要素はまだある。

追求できる所はある。確実に潰していけ、自分たちのやってる事は正しいんだ。

「ですが。10万3000冊の魔道書を覚えていたら？魔道書はこれらの文庫本じゃ無いんです。目を通すだけで魂が穢^{けが}れてしまう本それに、1ページ1ページに、びっしり文字が書かれているようなページが、どんなに少なくても1000ページはあります。そんな

ものを10万3000冊も記憶していたら、脳の85%くらい、簡単に費やせると思いますか」

論破できたか？

「神裂さん、そもそも人の「記憶」とは一つだけではありません。言葉や知識を司^{つかさ}どる「意味記憶」、運動の慣れなんかを司る「手続記憶」、そして思い出を司る「エピソード記憶」とか、色々あるんです」

「どういう事ですか？私には理解しかねますが」

「つまり、それぞれの記憶は容れ物が違うんです。燃えるゴミと燃えないゴミのようなものです。例えば頭を思いつきり打って記憶喪失になったって、ばぶばぶ言っ^ててそこら辺をハイハイする訳ないですよね？ってことは」

まさか、本当に…。

「10万3000冊の魔道書を覚えて「意味記憶」を増やした所で、思い出を司る「エピソード記憶」が圧迫されるなんて事は、脳医学上絶対にありえません。」

「解説は大変だと思いますが」

「それについては問題ねえよ」

「どうい^うことですか？」

魔術師が眉をひそめる。

「俺の右手は『幻想殺し』^{イマジンブレイカー}つつう能力を持つてな。それが『異能力』であるなら、神様の奇跡^{システム}も問答無用で無力化させる。つていう能力の右手だ」

「なるほど、それが本当なら解説なんてしなくても大丈夫ですね」

「それじゃあ、もしかして、インデックスを救えるって事か？」

「はい」

その言葉に神裂は泣いた。両手で顔を隠し、声をひそめて。全く人

のいなくなつた大通りで…。

その涙は歡喜で、自らの無力感の結晶で、感謝で、色々な感情がごちゃ混ぜになつて涙線をどんどん刺激していく。神裂は止まらない涙を止めようとはしなかった。

むしろ、もう少しこのままでいたいくらいだ。

でもそんな感情が不安定な状態で、最後に神裂の心を支配し、それでいっぱいになつた感情は……。

何よりも『歡喜』だつた。

神裂はそれをいち早くステイルに伝える。そうするとステイルは神裂が思つた通りの反応をした。

「は、ははは、あははははははは…そうか、彼女は、インデックスは助かるんだね」

「そうです。彼女の記憶をもつ、消さなくていいんです」

そう言つとステイルはこう言う。

「そうと決まれば話は早い。今夜にでも彼女を救おう」

「そうですね。ステイル」

決意した目をして、夜12時10分に上条家に二人は降り立った。そこには……。

- - - - - 同時刻 - - - - -

上条はインデックスにステイルと神裂の素性の事、インデックスにかけられている魔術の事。

全てを包み隠さず話した。（情報元は神裂を圧倒した、あの魔術師。

名前は知らない)

「どうやら、シヨックも受けたようだが聞いてくれた。しばらくして家でゴロゴロしているときに、ふと思い出したように上条が言った。」

「インデックス、ちょっといいか？」

「なに？とうま？」

上条はいきなりインデックスの体をペタペタと触っている。

インデックスは顔を真っ赤にしながら言った。

「なっ！とうま！？そういう事はダメなんだよ！」

上条は聞こえていないらしく、「ここでもないか…じゃあここか？違うか…」などと言っている。

「~~~~~っ!!」

ガブリ！という快活な…いや、殺人的な音がしたと思えば、上条は頭を丸かじりされていた。

- - - - 1分後 - - - -

傷だらけの上条はインデックスの前に正座させられていた。

「とうま、今なら許してあげるかもだよ」

聖母のような微笑みで言ってくる。

「いや、違うんです。別に他意は無かったです。神に誓って」

そんな会話を繰り返しているとき、玄関が不意に開いた。

「邪魔するよ……と、何やってるんだい君たちは？」

「お邪魔しま……コホンッ、どうやら見間違いだったようですね」

- - - - 状況説明中 - - - -

「とりあえず、分かっていただけでしたでせうか」

ステイルはため息をついて言う。

「とりあえずこんなラヴコメは終わりにして早く呪いを解くよ」

「ラヴコメでは無いけど…わかった。やろう」

「場所は喉の奥だと思つよ。頭蓋骨の保護がない分、直線距離ならつむじより『脳』に近い場所だしね。そして滅多に人に見られず、それ以上に人に触れさせない部分。だからそこに紋章が一文字刻まれているはずだよ」

インデックスが言う。

「ありがとう、じゃあインデックス。口を開けてくれるか？」

「わかった」

上条は一度だけ目を細めると、意を決してさらに少女の口の中に手をつ突っ込んだ。

ぬるり、と。それ自体が別の生き物のように蠢く口の中に指が滑り込む。

異様なほど熱を帯びた唾液が指に絡みつく。

上条は不気味とも言える舌の感触に一瞬ためらってから、インデックスの喉を突くように、一気に指を押し込んだ。

ぐっ、と強烈な吐き気にインデックスの体が大きく震えた——
ような気がした。

パチン、と静電気が散るような感触を上条は右手の人差し指に感じると同時、

バギン！ と。上条の右手が勢い良く後ろへ吹き飛ばされた。

「がっ……………！？」

ぱたぱた、と一布団や畳の上に血の珠がいくつも落ちる。

まるで一拳銃で手首を撃たれたような衝撃に、上条は思わず自分の右手を見た。

ボタバタと音を立てて鮮血が畳の上へ落ちていく。

そして、顔の前へ持つてきた右手の、そのさらに向こう。

ぐったりと倒れていたはずのインデックスの両目が静かに開き、

その眼は赤く光っていた。

それは眼球の色ではない。

眼球の中に浮かぶ、血のように真っ赤な魔法陣の輝きだ。

(まずい……ッ！！)

上条が本能的な背筋の震えに、壊れた右手を突きつける前に、インデックスの両目が恐ろしいくらい真っ赤に輝き、そして何かが発した。

ゴッ！！という凄まじい衝撃と共に上条の体はそのまま向かいの本棚へ激突する。

本棚を作っている木の板がまとめて爆ぜ割れ、バラバラと大量の本が落ちる音が響く。

上条の全身の関節もバラバラと砕けてしまいそうな激痛に襲われる。ガチガチと震え、ともすれば崩れ落ちてしまいそうな両足で上条はかろうじて起き上がる。

口の中に溜まった唾の中に、鉄臭い血の味が混じっていた。

「——警告、第三章第二節。Index - Librorum - Prohibitorum——インデックス禁書目録の『首輪』、第一から第三まで全結界の貫通を確認。再生準備……失敗。『首輪』の自己再生は不可能、現状、一〇万三〇〇〇冊の『書庫』の保護のため、侵入者の迎撃を優先します」

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

アドバイスお願いします

幻想を殺したヒーロー

上条は、目の前を見る。

インデックスは、まるで骨も関節もないかのような不気味な動きでゆっくりと立ち上がる。

その両目に宿る真紅の魔法陣が上条を射抜く。

それは眼であって、目ではない。

そこに人間らしい光はなく、そこに少女らしいぬくもりは存在しない。

（魔力がないから、私には使えないの）

「……、そういやあ、一つだけ聞いてなかったっけか」

上条はボロボロの右手を握り締めながら、口の中で小さく言った。
「超能力者でもないテメエが、一体どうして魔力がないのかって理由」

その理由が、おそらくこれだ。

教会は二重三重の防御網^{セキユリテイ}を用意していた。

もし仮に、だれかが『完全記憶能力』の秘密について知り、『首輪』を外そうとした場合。

インデックスは自動的に一〇万三〇〇〇冊の魔道書を操り。

その『最強』とも言える魔術を使って、文字通り真実を知った者の口を封じる。

その自動迎撃システムを組み上げるために、インデックスの魔力は全てそこに注ぎ込まれてしまったのだ。

「『書庫』内の一〇万三〇〇〇冊により、防壁に傷をつけた魔術の術式を逆算……失敗。

該当する魔術は発見できず。術式の構成を暴き、対侵入者用の特定^{□カル}魔術^{ウェボン}を組み合わせます」

インデックスは、糸で操られる死体のように小さく首を曲げて、

「——侵入者個人に対して最も有効な魔術の組み込みに成功しました。」

これより特定魔術『^{セント}聖ジョージの聖域』を発動、侵入者を破壊します」

バギン！ とすさまじい音を立てて、インデックスの両目にあつた二つの魔法陣が一気に拡大した。

インデックスの顔の前には、直径二メートル強の魔法陣が二つ、重なるように配置してある。

それは左右一つずつの眼球を中心に固定されているようで、インデックスが軽く首を動かすと空中に浮かぶ魔法陣も同じように後を追った。

「。、」

インデックスが何か——もはや人の頭では理解できない『何か』を歌う。

瞬間、インデックスの両目を中心としていた二つの魔法陣がいきなり輝いて、爆発した。

ただし、それは青白い火花ではなく、真つ黒な雷のようなものだった。

全く非科学的な事を言つて申し訳ないが、それは空間を直接引き裂いた亀裂のようなものに見えた。

バギン！ と。

二つの魔法陣の接点を中心に、ガラスに弾丸をぶち込んだように、空気に真つ黒な亀裂が四方八方へ、部屋の隅々まで走り抜けていく。まるでそれ自体が何人たりともインデックスに近づけまいとする、一つの防壁であるかのように。

めき……、と。何かが脈動するように、亀裂が内側から膨らんでいく。

わずかに開いた漆黒の亀裂の隙間から流れ出るのは、獣のような匂い。

「あ、」

上条は、唐突に知った。

本能に近い部分が叫んでいる。あの亀裂の中にあるものが「何か」は知らない。

だが、それを見たら、それを真正面から真正直に直視したら。

たったそれだけで上条当麻という一存在は崩壊してしまう、と。

「は」

上条は、震えている。

どんどんどんどん亀裂が広がっていき、その内側から『何か』が近づいてきている事を知っても。

上条は動けない。震えている、震えている、本当に震えている。だって、なぜなら。

「それは、さえ倒してしまえば。」

他の誰でもない、自分自身の手でインデックスを助け出す事ができるのだから。

[illegible]

だから、上条は歓喜に震えていた

「怖い？ そんなはずはない。だって、ずっと待っていたんだから。」

システム
神様の奇跡すら打ち消せると言っておきながら、不良からは逃げる

事もなく、こんな役立たずな右手を持つて。

それでも、自分のせいで一人の女の子の背中が斬られた時。

自分の無力感を呪いながら、それでもたった一人の女の子を助けた
いと、ずっと願っていたんだから！

別にこんな物語の主人公になりたかった訳じゃない。

ただ、こんな残酷すぎる物語さえ打ち消し、引き裂くほどの力が右手に宿っているんだから！

たった四メートル。

もう一度、あの少女に触れるだけで全てを終わらせる事ができるのだから！

だから、上条は『亀裂』へ——その先にいるインデックスの元へと走った。

その右手を握り締めて。

こんな残酷な物語の、無限に続くつまらないつまらない結末を打ち消すために。

同時、ベギリ——と、亀裂が一気に広がり、『開いた』。

ニュアンスとしては、処女を無理矢理引き裂いたような痛々しさ。そして部屋の端から端まで達するほど巨大な亀裂の奥から、『何か』が覗き込んで、

ゴッ！！ と。亀裂の奥から光の柱が襲いかかってきた。

もったとえるなら直径一メートルほどのレーザー兵器に近い。

太陽を溶かしたような純白の光が襲いかかってきた瞬間、上条は迷わずボロボロの右手を顔の前に突き出した。

じゅう、と熱した鉄板に肉を押し付けるような激突音。

だが、痛みはない。熱もない。まるで消火ホースでぶち撒かれる水の柱を透明な壁で弾いているかのように、光の柱は上条の右手に激突した瞬間、四方八方へと飛び散っていく。

それでも、『光の柱』そのものを完全に消し去る事はできない。まるでステイルの魔女狩りの王のように、消しても消してもキリがない感じ。

畳につけた両足がじりじりと後ろへ下がり、ともすれば重圧に右手が弾き飛ばされそうになる。

（違う……これは、そんなもんじゃ………ッ！？）

上条は思わず空いた左手で吹き飛ばされそうな右手の手首を掴む。
右手の掌の皮膚がビリビリと痛みを發した。魔術が食い込んでくる。

右手の処理能力が追いつかず、ジリジリとミリ単位で光の柱が上条の方へと近づいてきているのだ。

（単純な『物量』だけじゃねえ……ッ！ 光の一粒一粒の『質』がバラバラじゃねえか！！）

ひよつとすると、インデックスは一〇万三〇〇〇冊の魔道書を使って、一〇万三〇〇〇種類もの魔術を同時に使っているのかもしれない。

一冊一冊が『必殺』の意味を持つ、その全てを使つて。

何かを叫びかけたスタイルは、けれど途中で背中を殴られたように息を詰まらせた。

目の前にある光の柱——そしてそれを放つインデックスを眺めて心臓が止まったような顔をしている。

神裂が……あれだけ孤高で最強に見えた神裂が、目の前の光景に絶句していた。

「……ど、『竜王の殺息』って、そんな……」

上条は振り返らない。

振り返るだけの余裕がないのも事実だったし、もう現実から目をそらすのは嫌だった。

「おい、光の柱が何だか知ってんのか！」だから、振り返らないまま叫ぶ。

「コイツの名前は？ 正体は！？ 弱点は！？ 俺はどうすれば良い、一つ残らず全部まとめて片っ端から説明しやがれ！！」

二人の魔術師は、呆然と亀裂の向こう——インデックスの方を見たようだった。

「——『聖ジョージの聖域』は侵入者に対して効果が見られません。他の術式へ切り替え、引き続き『首輪』保護のため侵入者の破壊を継続します」

それは間違いなく二人の魔術師の知らないインデックスだっただろう。

それは間違いなく教会に教えられなかったインデックスだっただろう。

「……、」

ステイルはほんの一瞬、本当に一瞬だけ、奥歯が砕けるほど歯を食いしばって、

「—— Fortiss931」
そう言う。

「——世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よそれは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり。」

それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり。

その名は炎、—その役は剣。

顕現せよ、—我が身を喰らいて力と為せ

「——」

ステイルの修道服の胸元が大きく膨らんだ瞬間、内側からの力でボタンが弾け飛んだ。

轟！ という炎が酸素を吸い込む音と同時に、服の内側から巨大な炎の塊が飛び出した。

「魔女狩りの王で時間を稼ぐ！早く行け！さっさと彼女を救ってこい！上条当麻ッ！」

魔女狩りの王が上条に背を向け竜王の殺息に立ちはだかる。

だが、圧倒的に竜王の殺息が優勢だ。魔女狩りの王は押されている。「チッ！レベルが違う！もう持たないぞ！」

「—— Salvare000!——」

上条は神裂の叫び声を聞いた。それは日本語ではない、聞き慣れない言葉。

けれど、似たような言葉を——いや、名前を上条は一度だけ聞いた事がある。

学生寮で、ステイルと対峙した時。

彼が『魔法』を使う時に必ず名乗るものだった——『魔法名』。

神裂の持つ、二メートル近い長さの日本刀が大気を引き裂いた。七本の鋼系ワイヤーを用いる『七閃』ななせんが音を引き裂くような速度でインデックスの元へと襲いかかる。

だが、それはインデックスの体を狙うものではない。

インデックスの足元——脆いもろ畳を七本の鋼系ワイヤーが一気に切り裂いた。

突然に足場を失った彼女はそのまま後ろへ倒れ込む。

インデックスの『眼球』と連動していた魔法陣が動き、魔女狩りの王を狙っていたはずの光の柱が大きく狙いを外す。

アパートの壁から天井までが一気に引き裂かれた。

夜空に漂う漆黒の雲までもが引き裂かれる。

ひよつとすると大気圏の外にある人工衛星まで引き裂かれたかもしれない。

引き裂かれた壁や天井は、木片すら残さない。

代わりに、破壊された部分が光の柱と同じく純白の光の羽となった。はらはら、と。

どんな効果があるかも分からない光の羽が何十枚と、夏の夜に冬の雪のように舞い散る。

「それは『竜王の吐息』——伝説にある聖ジョージのドラゴンの一撃と同義です！ いかな力があるとはいえ、人の身でまともに取り合おうと考えないでください！」

「ダメです——上！——」

全てを引き裂くような神裂かんざきの叫び声。

もう手を伸ばせばインデックスの顔の前にある魔法陣に触れられる、
と思った矢先だった。

上条は足を止めず、そのまま上を、天井てんじやうを見る。

光の羽。

インデックスの『光の柱』が壁や天井を破壊した後生まれた、
何十枚もの光り輝く羽。まるで粉雪のようにゆっくりと舞い降りて
きたそれが、今まさに上条の頭上へ降りかかるうとしていた。

魔術を知らない上条でも何となく分かる。

それが、たった一枚でも触れてしまえば大変な事になる事ぐらい。

そして、何十枚もの羽は、やはり上条の右手を使えば簡単に打ち
消す事ができる事も。

だが、

「——警告、第二章第一節。炎の魔術の術式を逆算に成功しま
した。曲解した十字教の教義モティーフをルーンにより記述したものと判明。

対十字教用の術式を組み込み中……第一式、第二式、第三式。命名、

『一神よ、何故私を見捨てたのですか』エリ・エリ・レマ・サバク

タニ』完全発動まで十二秒」

『光の柱』の色が純白から血のように赤い真紅へと変化していく。

イノケンティウス

魔女狩りの王の再生スピードがみるみる弱まっていき、『光の柱』
へと押されていく。

何十枚もの光の羽を一枚一枚右手で撃ち落としていたら、おそら
く時間がかかりすぎる。インデックスに体勢を立て直される恐れも
あるし、何より魔女狩りの王がそれまで保もたないと思う。

頭上には何十枚と舞う光の羽、

足元にはたった一つの想おもいすら利用され、糸で操られる一人の少
女。

どちらかを救えば、どちらかが倒れるという、たったそれだけの
お話。

もちろん、答えなんて決まっていた。

この戦いの中、上条当麻は自分の身を守るために右手を振るって
いた訳ではない。

ただ、たった一人の女の子を助けるために、魔術師と戦っていた
んだから。

（この物語が、神様の作った奇跡の通りに動いてるってんなら——

——）

上条は握った拳の五本の指を思い切り開く。

まるで掌底でも浴びせるように、

（——まずは、その幻想をぶち殺す！！）

そして、上条は右手を振り下ろした。

そこにある黒い亀裂、さらにその先にある亀裂を生み出す魔法陣。
上条の右手が、それらをあっさりと引き裂いた。

本当、今まで何でこんなものに苦しめられていたのか笑いたくな
るほどに。

あっさりと、水に濡れた金魚すくいの紙でも突き破るように。

「——警、こく。最終……章。第、零——……。『首輪、』致
命的な、破壊……再生、不可……消」

ブツン、とインデックスの口から全ての声が消えた。

光の柱も消え、魔法陣もなくなり、部屋中に走った亀裂が消しゴ
ムで消すように消えていき、

その時、上条当麻の頭の上に、一枚の光の羽が舞い降りようとし
た。

上条はその瞬間、誰かの叫び声を聞いたような気がした。

それがステイルか、神裂か、あるいは自分自身の声なのか、
目を覚ました（かもしれない）インデックスの声だったのか、それ
すらも上条には分からなかった。

ただひとつ、鮮明に響いた叫び声があった。

「貫徹！！」

それは、神裂を手駒に取った男の声だった。いつも冷静沈着なはずの男の声。

「フォトンレーザー
光帯収束砲ッ！」

パキンッ！と音が鳴り、光の羽が砕ける。上条は顔を上げて状況を見る。

何十枚という光の羽が上条の全身へと舞い降りてくる。

「無茶してんじゃねえよ。バカ」

上条の頭上にある光の羽が一瞬で真紅の炎で埋め尽くされる。

それは、まるで生き物のように部屋中を這いまわり、部屋の中にある光の羽を焼き尽くした。

その時、上条は術者を見た。顔はステイルを短髪にしたような感じ。そしてステイルが呟く

「**師匠**」
せんせい

上条の意識は落ちていった

[illegible]

アドバイスを願います

師匠

「師匠？」
せんせい

なぜ？師匠は今までどこへ？弟子の僕に何も言わずに…あれ？だんだん腹が立ってきたぞ？

よし、師匠には罰を与えよう。行けっ！不意打ちイノケンッ！！！

「行け。魔女狩りの王」
イノケンティウス

「そんなモンか？——桜火。」
おうか

花びらの形をした炎が竜巻状になって魔女狩りの王に襲いかかる。

「っ！！。上級魔術はセコいですよ師匠！」
せんせい

「っるせえ！てめえは法王級の魔術つかってんじゃねえか！」

「はあ、そこまです。——豪水裂破」
スプラッシュ

物凄い勢いで水が降り注ぐ。

桜火は中和され、魔女狩りの王は砕かれた。

「っ！！！！」

「チッ！」

「そんなことやってないで、こっからは仲間としてやってくんですから」

それにステイルは啞然とした。

スプラッシュ豪水裂破は中級魔法だ。つまり、上級魔法と法王級魔法を中級魔法で相殺したのだ。

しかもそのあとの言葉がびっくりだ。『こっからは仲間としてやってくるんですから』だと？

「ちよつと待て！いつ僕がお前の仲間に「ステイル、俺たちの仲間になれ」師匠！？」
せんせい

そう言うといきなり神裂と僕に紙を渡してくる。

「僕達の組織名と目的です。それでは」

そう言って虚空へと消える。

「何だっただんですか？あの人たちは」

「分からない。ただ、敵なら厄介、味方なら全世界を相手に喧嘩を売っても勝てるね」

紙を見ながらステイルが答える。

「全世界を相手に喧嘩を売っても勝てる？」

「その通り。最も強く、最も小さく、そして最も活動しない魔術組織」

渡された紙にはこう書いてあった。

・組織名…光求む者の標^{しるし}

・目的…誰もが望むハッピーエンドを作ること

「何もないね？」

大学病院の診察室で、小太りの医者はそう言った。

回転椅子の上でくるくる回っている医者は、自分がカエルに似ている事を自覚しているのか、胸元のIDカードに小さなアマガエルのシールが貼り付けてある。

博愛・王義なインデックスだったが、科学者だけは嫌いだった。

魔術師も変人ぞろいと言えはその通りだが、科学者はその上を行くと思う。

何でこんなヤツと二人つきりなんだと思うが、連れはいないのでから仕方がない。

連れは、いないのだから。

「患者さんでもない人に敬語を使うのもどうかと思うのでやめておくよ？」 コイツは医者として君に贈る最初で最後の質問なんだけど、君は一体病院に何しに来たんだい？」

そんな事は、インデックスにだって分からない。

本当に、誰も。誰だって、本当の事は教えてくれなかった。

いきなり、今まで一年周期で記憶を消されてきたとか、その忌まわしい循環から救い出すために一人の少年が命を賭けたとか、敵だと思ってた魔術師からそんな事言われても困る。

「それにつけても、学園都市にIDを持たない人間が三人もいたとはね？」 謎の閃光に監視用の衛星が一基撃ち抜かれたそうだし、今ごろ風紀委員はてんでこ舞いだね？」

それじゃ最初で最後の質問になってない、とインデックスは思う。IDを持っていない人間が三人……一人はインデックス。残る二

人はあの魔術師達だろう。

今まで散々人を追い回してたくせに、人を病院に運ぶとさつさどこかへ行ってしまった。

「ところで、その手にある手紙は彼らから贈られたものだよな？」
カエル顔の医者はいンデックスの持っている、ラブレターでも入ってそうな封筒を見る。

インデックスはムツとして、ビリビリと強引に封筒を破って手紙を取り出した。

「つとつと？ それは君宛あてではなくあの少年宛あてのものだと思うけど？」

いいんです、とインデックスは不機嫌そうに答えた。
大体、差し出し人が『炎の魔術師（ステイル・マグヌス）』で『親愛なる（Dear）上条当麻へ』となっている時点で怪しすぎる。
封筒に貼り付けられたハートのシールに殺氣じみた悪意さえ感じてしまう。

ちなみに手紙には、

『挨拶は無駄なので省かせてもらおうよ。』

まったくよくもやってくれたなこの野郎と言いたい所だけど、その個人的な思いの丈をぶつけてしまうと世界中の木々を残らず切り倒しても紙が足りなくなるのでやめておくよこの野郎』

こんな感じの便箋びんせんが八枚もあった。

インデックスは無言で一枚一枚グシャグシャと丸めて後ろへポイポイ投げ捨てる。

自分の仕事場を汚されていく医者のカエル顔がどんどん困り顔になっっていくが、

泣く寸前のいじめられっ子みたいな妙な威圧感を全身から放つインデックスに何も言う事ができない。

と、九枚目——最後の便箋にこんな事が書いてあった。

『とりあえず、必要最低限の礼儀として、手伝ってもらった君にはあの子と、それを取り巻く環境について説明しておく。あとあと貸

し借りとか言われても困るしね。

科学者^{きみたち}だけでは不安なので、医者^{きみたち}のいない間に魔術師^{ほうたくち}もあの子の事を調べてみたけど、問題はなさそうだ。

上のイギリス清教の下した判断は、表向きなら『首輪』の外れたあの子を大至急連れ戻すようにって感じだけど、実際には様子見というのが正しいかな。

僕個人としては、一瞬一秒でもあの子の側^{そば}に君がいる事は許せないんだけど。

教会が用意した自動書記^{ヨハネのペン}とはいえ、あの子は一〇万三〇〇〇冊の魔道書を用いて魔術を使った。そして、自動書記^{ヨハネのペン}そのものが破壊された今、あの子は自分の意思で魔術を使えるかどうか。

もし仮に、自動書記^{ヨハネのペン}を失った事で『あの子の魔力が回復した』のなら、僕達も態勢を整えないといけない。

まあ、魔力の回復なんてありえないとは思うけど。注意するに越した事はない、って所だね。

一〇万三〇〇〇冊を自在に操る『魔神』ってのはそれぐらいの危険があるって事かな。

それとP・S・この手紙は読み終わると同時に爆発するようにしておいた。真相に気づいたとはいえ、勝手に「賭け^か」に出た罰だ、その自慢の右手、指一本ぐらい吹っ飛ばしておきたまえ」

なんて書かれた挙げ句、手紙の最後にスタイルお得意のルーン文字が刻んであった。

慌てて手紙を放り捨てると同時に、クラッカーみたいな破裂音と共に手紙が粉々に弾け飛ぶ^{はじ}。

「なかなか過激なお友達だね？ うん、液化爆薬でも染み込ませてあったのかな？」

そこで驚かない医者も相当にぶっ飛んでる、とインデックスは半分以上本気で思う。

けれど、インデックスも感情が麻痺^{まひ}しているのか、それ以上の考

えは浮かばない。

だから、ただ病院^{じやう}へやってきた目的を果たす。

「あの少年の事なら、直接会って確かめた方が早い……と言いたい所だけだね？」

カエル顔の医者は、本当に面白そうに言った。

「本人の前でシヨックを受けるのも失礼だから、手っ取り早くレックスワンだね？」

こんこん、と病室のドアを二回ノックした。

たったそれだけの仕草に、インデックスは心臓が破裂しそうになる。

返事が返るまでの間にそわそわと掌^{てのひら}についた汗を修道服のスカートでごしごし拭^ふいて、ついでに十字を切った。

はい？ と少年の声が返ってきた。

インデックスはドアに手をかけた所で、はい？ と言われたからにはここで『入って良い？』と聞くべきかと迷った。

けれど逆にしつこい野郎だささと入ってくりや良いのにかかわれるのもなんか恐^{こわ}い。すごくすごく恐い。

ギクシャクとロボットみたいにドアを開ける。

六人一部屋の病室ではなく、一人一部屋の個室だった。

壁も床も天井も白^{てんじやう}一色のせい、距離感がズラされて妙に広く感じられる。

少年は真っ白なベッドの上にいて、上半身だけ起こしていた。

ベッドの側^{そば}の窓は開いていて、ひらひらと真っ白なカーテンが揺らいでいた。

生きていた。

たったそれだけの事実、インデックスは涙がこぼれるかと思っ

た。
今すぐ少年の胸に飛びつくべきか、それともあんな無茶をした事にまず頭を丸かじりするべきかちょっと迷う。

あの……、と頭にハチマキみたいに包帯を巻いた少年は、小さく首を傾^{かし}げて、言った。

「あなた、病室を間違えていませんか？」

少年の言葉はあまりに丁寧で、不審そうで、様子を探るような声だった。

まるで、顔を見たこともない赤の他人に電話で話しかけるような声。

「……、っ」

インデックスは、小さく息を止める。視線が、どうしても下を向く。

超能力者が無理矢理に力を使い続けた反動、そしてインデックス自身が放った（らしい、はつきり言って彼女は全く覚えていない）光の攻撃は、一人の少年の脳を深く傷つけていた。

それが物理的な――つまりただの『傷』ならば、背中を斬^きられたインデックスの時と同じく回復魔法でどうにかなるかもしれないだが、透明な少年には幻想殺^{イマジンプレイカー}しという名の右手があった。

それは、モノの善悪を問わず、あらゆる魔術を打ち消してしまうのだ。

つまり、少年を治そうとしても、その回復魔法さえ打ち消されてしまう。

ある少年は、身体^{からだ}ではなく精神^{こころ}が死んだという、たったそれだけのお話。

あのう？ という、不安そうな、否、心配そうな少年の声。

インデックスはなぜか、透明な少年がそんな声を出すのが許せなかった。

少年は自分のために傷ついた。なのに、少年が自分の事を心配するなんて、そんなのずるい。

インデックスは胸に込み上げる何かを飲み込むように息を吸う。

笑う事は、できたと思う。

少年はどこまでも透明で、インデックスの事なんて少しも覚えていなかった。

「あの、大丈夫ですか？　なんか君、ものすごく辛そうだ」
なのに、透明な少年は一発で完璧な笑顔^{かんぺき}を打ち砕く。

そう言えば、この少年はいつも笑顔の裏に隠れた本音を覗き込もうとするのだった。

「うつん、大丈夫だよ？」インデックスは、息を吐きながら、「大丈夫に、決まってるよ」

透明な少年はしばらくインデックスの顔を眺めていたが、

「……。あの、ひょっとして。俺達って、知り合いなのか？」

その質問こそが、インデックスには一番辛い。

それはつまり、透明な少年は自分の事など何も分かっていないという証拠なのだから。

何も。本当に、何も。

うつん……。と。インデックスは、ポツンと病室の真ん中に立ったまま、答えた。

まるでマンガに出てくる小学生が宿題を忘れて廊下に立たされるような、そんな仕草だった。

「とうま、覚えてない？　私達、学生寮のベランダで出会ったんだよ？」

「——俺^{おれ}、学生寮なんかに住んでたの？」

「……とうま、覚えてない？　とうまの右手で私の『歩く教会』が壊れちゃったんだよ？」

「——あるくきょうかいって、なに？　『歩く協会』……散歩クラブ？」

「——とうま、覚えてない？　とうまは私のために魔術師と戦ってくれたんだよ？」

「——とうまって、誰^{だれ}の名前？」

インデックスの口は、あと少しで止まってしまいそうだった。

「とうま、覚えてない？」

それでも、これだけは聞いておきたかった。

「インデックスは、とうまの事が好きだったんだよ？」

「ごめん、と透明な少年は言った。

「インデックスって、何？ 人の名前じゃないだろうから、俺、犬か猫でも飼ってるの？」

「うえ……、と。インデックスは『泣き』の衝動が胸の辺りまでせり上がってくる。

けれど、インデックスは全てを噛み殺し、飲み込んだ。

飲み込んだまま、笑う。完璧な笑みとはほど遠い、ボロボロの笑顔にしかならなかったけど、

「なんつってな、引！っかかったあ！ あっはっはーのはーっ！！」

はえ……？ とインデックスの動きが止まった。

透明な少年の不安そうな顔が消えている。

まるでぐると入れ替わったように犬歯剥き出しの、超邪悪な笑みが広がっている。

「犬猫言われてナニ感極まってるんだマゾ。お前はあれですか、首輪趣味ですか。ワイワイ俺あこの歳で幼女監禁逮捕女の子に興味があったんですエンドを迎えるつもりはサラサラねーぞ」

透明な少年には、いつの間にか色がついていた。

インデックスには訳が分からない。

幻覚かと思って両目をこしこし擦り、幻聴かと思って小指で耳の穴をほじってみる。

何だかサイズがぴったり合ってるはずの修道服の肩が片方ずるっつり落ちていてような錯覚に陥る。

「魔術を受けて記憶がトんだんじゃ……」

「……なんか忘れてた方が良かったみてーな言い方だなオイ」

上条はため息をついて、

「おまえには俺が最後の最後、自分で選んで光の羽を浴びたように見えたんだよな」

「ように、見えた？」

「そう、魔術って便利だね。そんな幻覚を植え付けちゃうなんて」

「もしかして、記憶操作？」

「そういうと上条は、

「だ〜いせ〜いか〜い！その通り。オレがああ男とカエルの医者に頼んだら快く引き受けてくれたよ。タネ明かしの時に本当の記憶が流れるように魔術を組んだらしいぜ」

その言葉と同時に、映像が頭の中に流れてくる。

あ、とインデックスは思わず声に出してしまった。

ぼうぜん
呆然と、ただ呆然と。

床の上でぺたりと女の子座りしたインデックスは上条の顔を見上げた。

断言できる、絶対修道服の肩はずり落ちてる。それぐらい間抜けな顔になっている。

「それにしたってお前の顔ったらねーよなー。普段さんざん自己犠牲イアで人を振り回してたお前の事だ、今回の事でちったあ自分見直す事できたんじゃないの？」

……、インデックスは何も答えない。

「——って、あれ？……あの一」

——上条はさすがに不安になってちよつと声のトーンを落としてみる。

インデックスの顔がゆっくりと俯むついていき、長い銀色の前髪で表情が隠れる。

女の子座りで肩が小刻みにぶるぶる震えている。何だか知らない

けど歯を食いしばってる。

果てしなく嫌なトーンに、上条は思わず探りを入れてみた。

「えっと、一つお尋ねしたいんですが、よろしいでございますか姫？」

なに？ とインデックスは答える。

「あの、もしかして……本気で怒って、ます？」

ナースコールがプープー鳴る。

頭のとっぺんを思いつきり丸かじりされた少年の絶叫が病棟中に響き渡る。

ぶんぶん、という擬音^{ぎおん}が似合いそうな動きでインデックスは病室を出て行った。

おっと？ という声が入口の辺りで聞こえる。

どうやら入れ替わりに入ってこようとしたカエル顔の医者が飛び出してきたインデックスとぶつかりそうになったらしい。

「ナースコールがあったからやってきたけど……あー、これはひどいね？」

少年はベッドから上半身だけずり落ちて、頭のとっぺんを両手で押さえて泣いていた。

死ぬ、これはホントに死ぬ、という独り言がなんかりアルで恐い。

こうしてまた日常は始まる。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

アドバイスお願いします

登場

学園都市には窓のないビルがある。

ドアも窓も廊下も階段もない、建物として機能しないビル。空間移動を使わない限りは出入りも出来ない密室の中心に、巨大なガラスも円筒器は鎮座していた。

その巨大な強化ガラスの円筒の中には赤い液体が満たされている。広大な部屋の四方は全て機械類で埋め尽くされ、そこから伸びる数千万ものコードやチューブが床を這い、中央の円筒に接続されていた。

窓のないその部屋はいつも闇に包まれていた。ただし、円筒を遠巻きに取り囲む機械類のランプやモニタの光がまるで夜空の星のように瞬いている。

赤い液体に満たされた円筒の中には、緑色の手術衣を着た人間が逆さに浮かんでいた。

学園都市統括理事長『人間』アレイスター。

それは男にも女にも見え、大人にも子供にも見え、聖人にも囚人にも見える。その『人間』は自分の生命活動を全て機械に預けることで、計算上ではおよそ千七百年もの寿命を手に入れていた。脳を含め全身はほぼ仮死状態に近く、思考の大半も機械によって補助している。

(・・・、さて。そろそろか)

アレイスターがそう思った瞬間、タイミングを合わせたかのように

に円筒の正面に、唐突に二つの影が現れた。

一人は小柄な空間移動能力者の少女、そしてもう一人は彼女にエスコートされるように手をつないだ大男だ。

空間移動能力者は一言も言葉を発しないまま会釈をすると、再び虚空へ消える。

闇の中には大男だけが取り残された。

その大男は短い金髪をツンツンに尖らせ、青いサングラスで目線を隠した少年だった。アロハシャツにハーフパンツという、こんな場所にそぐわない格好をしている。

つちみかどもとはる
土御門元春。イギリス清教の情報をリークする学園都市の手駒だ。

ウチ
「何で学園都市に光求む者の標が居るんだ！」

土御門は声を荒げた。
ウチ
学園都市に來たのは必要悪の教会なんてレベルの魔術結社——組織
じゃないのだ。

「心配するな。何せ、彼らを招待したのは私だからな」
「招待した？」

土御門は怪訝そうに眉をひそめる。すると、アレイスターは懐かしむような遠い目をして言った。

「光求む者の標のリーダーとは友達でな」
あそこ

そこまで言つと、急に怯えたような顔になり、か細い声で言った。

「私の師なのだよ」

土御門は純粹に驚いていた。どんなイレギュラーも自分の計画に取
プラン
り込み、対処する。

天使など眼中に無いような素振りさえ見せる。そんなアレイスターが今でも恐怖する師は誰なのか。
少し会って見たくもある。

「会ってみたいですか？」

土御門は後ろから突然声がしたのに驚き、反対方向に飛び退く。静かに、そして気取られぬように臨戦態勢に入る。

「土御門、彼は味方だ。というか彼が私の言った友達だよ」

少し幼い顔つき。身長は180cmもないだろう。せいぜい170後半だ。

肩に届くか届かないかといった所まで伸ばした髪。黒髪、黒目で服装はローブを着崩して着ている。

簡単に言々と超イケメン。絶世の美男子と言って差し支え無いであろう。

「久しぶりだな。アレイスター」

「ホントだな。何十年、いや、何百年ぶりだ？カール」

二人とも仕事用のような敬語から口調を崩している。要するにタメ口だ。

土御門は珍しいものを見るような目で見ていた。

あんなに堅苦しいカチカチアレイスターくんが、タメ口を使っているのだ。だが。

「カール？光求む者の標のリーダーはカーカスだったと思ったが？」

「あだ名ですよ。『カーカス・ルーシエクト』略してカール。ちなみに日本国籍も持つてて名前は御剣神哉です」

「で、何しに来たんだ？まさか用も無く来たわけじゃあるまい」

アレイスターが言う。

「そう。3つの頼みがあるんだ」

「よっぽどの事じゃ無ければ聞くが？」

「まず、身体測定システムスキャンのときはレベル2の身体強化能力って設定にしてほしい。そして上条さんの居る高校に僕を編入させてほしい。最後に、アレイスターへの連絡、交渉、要請の権限がほしい」

「無論、許可しよう」

その言葉を聞くとカーカスはアレイスターに背を向け

「じゃあな。気が向いたらまた来るよ」

そう言ってレポートで帰って行った。

「はあり、知りたいことが知れたからもういい」

土御門はそう言いつつ、案内人にエスコートされ、帰って行った。

一人になったアレイスターは悪戯を思いついた子供のような表情で
 呟いた。

「平和に暮らしたいと？そうはいかんよ。カール」

そう言つてニヤニヤしながら都市伝説のサイトに行き、とあることを書き込む。

「さて、レベル5の皆さんはどう反応するのかな？」

タンツ。という短い音とともに Enter キーを押した。

[illegible]

「――倒れ伏せ、侵入者共！」
炸裂する怒号。

瞬間、上条は何十本もの見えない重力の手に全身を押さえつけられ銃を奪われた銀行強盗みたいに床に組み伏せられた。

侵入者共、という言葉にはステイルも含まれるのか、視界の隅で赤髪まじゆつしの魔術師が同じく床に叩きつけられるのが見えた。

「ご……ッ、が……！」

内臓を丸ごと絞られるような感覚に上条は必死に吐き気を押し殺す。

ギリギリ、と。強力な電磁石に縛られたような右腕を、一ミリ単位で自分の胸元へと引き寄せる。

とにかく右手で自分の体に触れる。

そうすれば記憶を取り戻した時と同じく自由を取り戻せるかもしれない。

「は、はは、あはははは！ 簡単には殺さん、じっくり私を楽しませろ！ 私は禁書目録に手をつけるつもりはないが、貴様で発散せねば自我を繋げる事も叶わんからな！」

鍊金術師は懐ふるから髪とうろの毛のように細い鍼はりを取り出す。
震ふるえる手はりで鍼はりを首筋に当てると、体内のスイッチを押しまわようと鍼はりを突き刺した。

アウレオルスは皮膚ひふに食いつく毒虫を払うように、
 鋳はりを横合いへ
 投げ捨てた。

まるでそれが攻撃開始の引き金の如く、アウレオルスは上条を睨み、

「待つて」

そこへ、姫神秋沙が立ち塞がった。

かつて、上条の盾になった時と全く同じ立ち位置。

だが決定的に状況が違う。アウレオルスが固執していたのは、姫神秋沙ではなく吸血殺しだ。

『目的』であるインデックスが手に入らなくなった以上、単なる『手段』に気を配る必要などどこにもない——ッ！

「ひめ、——」

だが、上条は言えなかった。

姫神の背中へは、本気で心配していた。

上条の事はもちろん、崩れつつあるアウレオルスの事も。

決定的に終わってしまう前に、どうにか立て直さなければならないと無言で語っていた。

その背中に、そんな残酷な真実を告げられるはずがない。

「邪魔だ、女——」

だが、それこそが失敗。

上条は銃口のようなアウレオルスの両眼を見た。本気の眼だった。慌てて右手を動かす。

いや、動かそうとする。止めなければ確実に姫神は巻き込まれる。

じりじりと、一ミリ一ミリ床に張り付いた右手を強引に引き寄せて、顔の前まで手繰り寄せる。己の人差し指を喰らうように、己の歯で必殺の右手に触れる。

バギン、と全身の骨を砕くような音と共に体の自由が戻る。チャンスだ、上条は起き上がる。

あとは姫神を突き飛ばし、アウレオルスを黙らせれ

「――死ね」

その一瞬間。アウレオルス＝イザードの言葉は確かに時間を止めていた。

刺殺。絞殺。毒殺。射殺。斬殺。撲殺。博殺。磔殺。焼殺。扼殺。圧殺。轢殺。凍殺。水殺。爆殺。知りうる限りのあらゆる殺人法と照らし合わせても、姫神の死因は分からない。

傷はなく、出血もなく、病気ですらもありえない。

ただ、死ぬ。

まるで電池が切れたように。

魂、なんてものが本当に存在するのなら、そっくり肉体から魂を抜き取られて抜け殻になったように。

姫神は、悲鳴すらあげなかった。

ぐらりと体が揺らぐ。

後ろへ向かって、仰向けに、つまりは上条に顔を見せるように姫神が倒れてくる。

ゆっくりと。ゆっくりと。見えなかった姫神の顔が見えてくる。

姫神は、くしゃくしゃに顔を歪めて笑っていた。

今にも泣き出しそうに、けれど決して涙を見せずに。

それは突然の驚きと衝撃からくるものではない。

あらかじめ覚悟していた、けれど変えられなかった結末に対する表情だ。

姫神秋沙は、アウレオルスの前に立てばこうなる事を始めから分かっていた。

それでも、一縷に満たない最後の希望にすがって、アウレオルスを止めようとした。

誰にも求められず、最後までモノのように扱われた一人の少女。

錬金術師が主人公になれなかったのと同じく、最後までヒロインになれないまま、人型の背景を取り除くようにあっさりと死に逝く事が決定した『吸血殺し』姫神秋沙。

そんなものを。黙って見ている事など、できるはずがなかった。

(ふざ———)

上条は、もはや錬金術師の事など視界に入れず、とにかく今にも倒れようとしている姫神秋沙へと飛びかかった。

何の理由もない。とにかく彼女がこのまま床に倒れたら、『死』という魔術まじゆつは、もう変えられようのない現実へと決定してしまうような気がしたからだ。

「———っけんじゃねえぞ、テメエ———！」

姫神ひめがみが崩れ落ちる寸前、その体をどうにか両手で抱きかかえる事ができた。姫神の体はひどく軽い。まるで大事なものが、体の中から抜け落ちてしまったかのように。

腕の中の、奇妙なほど柔らかい少女の体。

だが、弱々しいが確かに鼓動が伝わる。抱き止めた右手を伝って。「な……我が金色の練成を、右手で打ち消しただと？」錬金術師れんきんじゆつしの目が凍る。「ありえん、確かに姫神秋沙の死は確定した。その右手、聖域の秘術でも内包するか！」

「……、」

上条は答えない。

もういい。そんな理屈はどうでもいい。

単なる偶然、奪われた記憶きおくを取り戻した時と同じく、

『死ね』という命令を右手で打ち殺したただけの話なんて、本当にどうでも良い。

上条は、目の前の男が許せない。

同情もした。共感もした。

インデックスに忘れ去られ、それでも大切な彼女を傷つけられなかったその姿を見た時は、この男を前に拳こぶしを握る理由さえ見失ってしまったような気がした。

だけど、今はもうありえない。

たとえ一番大切な人に目の前で裏切られても、一番大切な人を他
の人間に奪われる瞬間しゅんかんを目の当たりにしても。

行き場のない、自分を責める事すらできない怒りに苛さいなまれても。

自分の事を、本当に大切に想おもってくれた人に対して、

その怒りを押し付けて、一人満足しようだなんて思考回路は、絶
対に認められない。

上条は、『記憶を失う前の』上条当麻とうまの事が何 つかからない。

どんな思い出を持ち、どんな過去を歩み、どんな想いと共に未来
へ進もうとしたのか。

何が好きで、何が嫌いで、一体何を守ってきて、全体何まもを護まもってい
こうと思っていたのか。

だけど、これだけは言える。

目の前の錬金術師。否いな、この『人間』を——『上条当麻』は認
める訳にはいかない。

「いいぜ、アウレオルス・イザード。テメエが何でも自分の思い通
りにできるなら——」

上条当麻は腕の中の姫神秋沙あきさを、ゆっくりと床へ下ろす。そして
立ち上がる。

無音に、けれど触れればそれだけで静電気が弾はじけそうなほどの怒り
を隠しもせずに、

「——まずは、そのふざけた幻想をぶち殺す……ッ!!」

他ならぬ、『幻想殺し』上条当麻の声で、言った。

錬金術師は真理を見る

色あせた、しかし確かに広大な空間に立つのは二人。

「……、」

上条は足元で微かな息を繰り返す姫神に視線を向けない。向けられない。

そんな暇はない。彼女は全力をもって、死を賭してまで引き止めた誰かがいた。

一秒でも彼女の事を思うなら、一瞬でも早く止めるべき人間が上条の視線の先にいる。

直線距離にして一〇メートル強。

言葉一つで思い通りに世界を歪める男の前に、その距離は絶望的とも言えるだろう。

「……、」

それでも上条は一步前へ。

立ち止まる必要はなく、背を向ける必然もない。

ただ巻き込まれたから戦っているのではなく、上条は己の足で戦場へ向かっていた。

「……、」

故に、言葉はなく、合図もなく。

超能力者と錬金術師は、互いが互いを倒すために、速やかに一潰し合いを開始した。

「——しっ！」

上条は小さく吐息を吐き、アウレオールの元へ爆発的に駆けようとする。

アウレオールは何もしない。

ただ懐にある細い鍼を一つ、己の首に打ち込むだけだ。

両者の距離は一〇メートル、気合を入れれば四歩で踏破可能な踏

み込みは、

「――窒息せよ」

しかし、上条が最初の「歩を踏み出した所でいきなりガクンと勢いを失った。

ギリギリ、と。上条は己の首に鋼鉄こうてつの綱つなでも巻きつけられたような苦痛に、思わず体をくの字に折り曲げる。

毒薬を飲んで苦しむ人間のように、自分の右手で自分の首を押さえつける。

アウレオルスに失われた記憶はコレで蘇よみがえり、『死ね』と言われた姫神はコレで死を免れた。

しかし、上条の呼吸は元に戻らない。

まるで喉の奥を瞬間接着剤で固められたように、呼吸ができない。

(落ち着け……、落ち着けッ)

上条はヒューヒューと不明瞭ふめいりょうな音を立てる己の喉から、食い込んだ右手の指を離す。

(アイツはなんて言った？ ロープで首が絞まる……じゃない。もつと曖昧あいまいに、もつと単純に、息が詰まって死ねって言ってんじゃねーか……ッ！)

そうして、一度は離れた右手の指を、上条は強引こっぴんに口の中へと潜もぐり込ませた。

まるで食べた物を胃袋から吐き出そうという動き。

喉のどの奥に指先が当たり、吐き気が背筋を走り抜けると同時、バギンとガラスが割れるような音と共に上条の呼吸が元に戻った。

この間、わずか五秒。

しかし、言葉一つを武器にするアウレオルスにとってはまだまだ遊びを含む五秒間。

アウレオルスは首に突き立った、髪の毛のように細い鍼はりをつまらなそうに捨て、

「感電死」

錬金術師が呟いた瞬間、上条の四方八方を青白い電光が取り囲ん

だ。

上条の背筋が凍る前に、空気を焼く電光の渦は我先にと上条へ殺到する。

(……ッ！？)

とっさに右手を突き出したのは計算しての事ではない。

だが、唯一突き出された右手の先を避雷針にするように、電光は集中した。

右手に触れた電光は猛毒に触れた蛇のように宙をのた打ち回り、けれど静かに消えていく。

(消せる……、)

だが、上条は緊張よりも高揚によって心臓の鼓動を高めていた。反して錬金術師の両目がわずかに細まる。

髪のように細い鍼をさらに一本、首筋に打ち込む。

「絞殺、及び圧殺」

水面のように波打つ床から何十本ものロープが飛び出した。

一瞬で上条の首をがんじがらめに縛り付けると同時、同じく波打つ天井から錆びた廃車が降ってくる。

(消せる……ッ)

だが、上条が右手を振り回すだけで首を締めるロープは水に濡れた紙の帯のように千切れ、頭上に降り注ぐ錆びた鋼鉄の塊は砂糖細工のように碎けて虚空へ消えてしまう。

アウレオルスは首筋に毒虫でも這われたように、首の鍼を投げ捨てた。

(消せる、できる。コイツの攻撃は右手で回避できる。言葉一つで命令するなら、逆に言えば一度に来る攻撃も一回ずつしかない。冷静に対処すれば怖い敵じゃねえ！)

『言葉』による命令を攻撃方法とするアウレオルスは、逆に言えば言葉を聞いて攻撃を先読みする事もできる。カルタの早取りと同じだ。『感電死』なら、『かんで』の三文字ぐらいで何の攻撃がやってくるか察知する事ができる。

時間にして一秒にも満たない余裕。

けれど、元々殴り合いに一秒の余裕などない。

ボクシングなら拳は〇・三秒で飛来する。

一発一発の威力は絶大であるものの、アウレオルスの攻撃速度は人間の拳と大差ない。

分かってしまえば『正体不明』に対する恐怖は拭い去れる。

ようは、ガキのケンカにナイフを持ち出す場違いな不良と殴り合うのと同じ事なのだ。

アウレオルスも上条の表情にある余裕を感じ取ったのか、わずかに眉をひそめ、

「なるほど。真説その右手、私の黄金練成も例の外に洩れず打ち消すらしい」

上条は、余裕を崩さない一錬金術師の言葉にわずかな疑念を抱き、「ならばこそ、右手で触れられぬ攻撃なら打ち消す事は不可能なのだな？」

上条は、今度こそアウレオルス「イザード」の言葉に凍りつくかと思った。

「銃をこの手に。弾丸は魔弾。用途は射出」

錬金術師は楽しげに細い鍼を己の首筋へ突き立てる。

アウレオルスが軽く右手を横へ振った瞬間、その手に 振りの剣が握られていた。

一見して絵本に出てくる王子様の持つ西洋剣——に見えるが、違う。

剣の鏢に、大昔の海賊が使っていたようなフリントロック銃が埋め込まれた暗器銃だ。

何かが来る——上条は思わず全身に緊張をみなぎらせ、

「人間の動体視力を超える速度にて射出を開始せよ」

空を裂くようにアウレオルスが西洋剣を横に一閃する——そう思った瞬間、火薬の破裂する爆発音が響く。

一瞬遅れて上条の頬を何かが浅く切り、次いで背後の壁に青白く輝く魔弾がぶち当たり、火花を散らす轟音が炸裂する。

「……、！」

簡単な話。剣に仕込んだ銃の引き金を引いた。それだけだ。だが、人間の眼球に飛来する魔弾を捉えるほどの性能を期待するのは酷だろう。

上条は、右手を構えたまま凍りついていた。

鉛の弾は容易に破壊力が想像できる分、下手な超能力や魔術より全身に緊張を走らせる。

魔術や超能力以前の問題として、魔弾は人体には避ける事も防ぐ事もできない『必殺』だ。

アウレオルスは満足そうな顔で首に突き立った鍼を投げ捨て、

「先の手順を量産せよ。一〇の暗器銃にて連続射出の用意」

唇に言葉を載せた瞬間、アウレオルスの左右二本の手には、それぞれ五丁ずつ計一〇丁もの剣の仕込み銃が、まるで鋼の扇のように広げて握られていた。

アレが射出されたら最後、上条当麻は絶対に避ける事も防ぐ事もできない。

（逃、げ……ッ！）

故に、上条は射出される前に回避しようとした。無駄な足掻きと認識しながらも、とっさに横合いに転がろうとして、

ふと思った。

上条の背後——すぐ足元にはかろうじて息をする姫神が、ずつと後ろの壁際には倒れて身動きの取れないステイルがいる。

「馬鹿が！ 何を立ち止まって——ッ！」

ギョツとしたステイルの叫び声と、

「準備は万端。一〇の暗器銃。同時射出を開始せよ」

アウレオルスの声が響く。だが、

「なに？」

音が響いただけで、何も起こらない。そして、

「甘い。甘すぎますよ」

そんな言葉が上条の正面から響く。知らぬ間に、いや、人に見えない速度で上条の前に現れた。

「あんたは……！！」

そこには黒髪の青年が立っていた。白銀の長刀を握っている青年が立っていた。

足元には斬り裂かれた無数の弾丸。アウレオウスはそれを見て言う。

「まさか、全ての魔弾を斬り裂いたというのか……！？」

だが青年はそれを無視して告げる。

「動くな」

その一言だけでアウレオウスの動きを封じる。そう。それはまるで

……。

「黄金練成か……！？」

しかしその問いには答えず、言葉を紡ぐ。

「我が名はカーカス・ルーシエクト。扉よ、愚かしい錬金術師に真理を。召喚^{サモン}……！」

床から白いナニカが出てくる。それは人型。目と鼻と口があるだけ。真っ白な人の形をしたナニカ。

「顕現せよ。真理^{ヴィールム}」

その言葉と同時に、扉が現れる。10メートルはあろうかという大きさ。

白いナニカ——真理^{ヴィールム}と言われたモノは言う。

「さあ、対価^{代価}を払わずに事を成そうとした愚かで無力な錬金術師よ。今までの対価^{代価}、ゼーんぶ、一括で返してもらうぜ。なあに、真理を

見してやるんだ。世のすべてと言い換えてもいいほど、貴重な情報だ。魂に刻みつけてやるよ。対価はもちろん……」

口が裂けたように笑う。

「デメエの全てだ」

同時、アウレオウスが扉に吸い込まれる。そして消える。

白いナニカが、扉が、そして、一人の少女の為に自らの全てを賭けた錬金術師が。

そして沈黙。上条とステイルがこの日、何百回目かの瞬きをした時。彼は現れた。

いや、居た。まるで最初から居たような、そんな自然さでそこに立っていた。

髪は茶色、オールバックになっている。キリつとした目。

顔はすこしふつくらしたように見えるが、面影がある。アウレオウスIIザードの面影がある。

「っっ！……」

ステイルはルーンを取り出し、上条は一步前に出て右拳を構える。アウレオウスの口が動く。上条が右拳を振りかぶろうとする。そして言葉を紡ぐ。

「疑問。ここはどこだ？そして私は誰だ？出来るだけ事細かに教えてくれ」

「………は？」

その問いに応えるべく、カーカスがアウレオウスの目の前まで歩く。

「あなたは記憶を無くしてしまいました」

「どうやらそのようだ。ただ全てを視^みたから分かる。どれだけ自分が愚かだったか。あんなのは八つ当たり^みに他ならない。一人の少女……その存在が記憶をなくす以前の私にどれだけ大切だったかは痛い程に分かる。だが、あそこまでの非人道的な行為は許せん。私が自らに課した魔法名……H o n o s 6 2 8 《我が名誉は世界のために

『魔法名はこれから自らの指針とし、目的にする。だが、その目的を達成するためには少し時間が必要だ』

上条は啞然としたまま聞く。

恐らく、あのヴィールムとかいうのは、その人間の全てを奪ったんだろう。

記憶を奪って記憶ではなく知識として入れた。災いが降りかからないように顔を奪い、すりかえた。

奪うのはいけない。悪いことだ。ただ、こんな風にハッピーエンドが見れるなら。

意味のある略奪は罪にはならないんじゃないか？なんていう風に思えてくる。

「だから」

そう言つて上条とステイルとカーカスの方に向く。

「だからそれまでの間、私が意味と目的を見つけ、一人で魔法名を実現できるまで、仲間で——いや」

こんなハッピーエンドになれるなら。

「——友で居てくれないか？」

アウレオウス友達のラスボスがパーティーになつてもいいんじゃないかと思う。

姫神とインデックスを連れて三沢塾を出る。

二人に事情を話すと二人とも納得してくれたようで、アウレオウスは晴れて俺達の友になった。

「そう言えばアウレオウスって家どうするんだ？」

「む？宿か？」

「まさかオレの家に泊まるなんてことは無いよな」

「ククク。心配するな、当麻に迷惑はかけんよ。金はあるのだ。ホテルでも探せばいい」

「だけど金が無くなった」「はあ、上条当麻。君は全く以ってバカ

だね」は？」

ステイルが言う。

「彼は学園都市でトップシェアを誇る進学塾の理事長だよ？無駄な浪費をしなければ億万長者にだってなれる。今まではインデックスのことや姫神秋沙のことで金をいっぱい使ってたけれど…それでさえ貯蓄が出来ているんだ。そこらへんのホテルにずっと泊まってたって金は溜まるよ。いざとなれば理事長室で寝泊まりすればいいしね」

そして、その時路上でorz状態になってる上条が居たとか居なかったとか……。

オリキャラ設定

名前…カーカス・ルーシエクト

フルネーム…カーカス・ド・ヴァンルート・アインス・エル・ルーシエクト

あだ名…カール

特徴…黒髪黒目。めっちゃめっちゃイケメソ。TOD2のリオンの目を優しくした感じ。

性格…基本的に善人。誰にでも手を差し伸べる。温和。ボケでもツッコミでもok。

能力…元からある能力は『ヒューマン・オブ・ヒューマン絶対強者』。

進化、適応、不老不死、才能、魔眼、の五つが付いている。

進化…物体。能力。生物に関わらず進化させることができる。

例 馬をペガサスに等。

適応…あらゆるものに適応する能力。

例 4000度の炎に1兆分の1秒で適応してノーダメージ等。

不老不死…そのままの意味。

才能…要するに全ての才能。

例 一度見ただけでその技を使った人間以上の力で行使可能。等。

魔眼…目に映るもの全てを視ることができ、視界は359度。

要するに、359度の中にあるモノなら原子だろうと暗黒物質だろうと視ることができる。

ちなみに未来線も視れる。透視もできる。視るだけではなく視たものを操作できる。

なのでギアスもできるし、殲滅眼のようなこともできる。

ヒューマン・オブ・ヒューマン
『絶対強者』の能力を使って創った能力が『完全改造』。

フリーカスタマイズ
『完全改造』…自分自身を好き勝手に改造する能力。

例 自分をレベル1の身体能力強化と認識させるようにする等。

常に8つの封印をしている。

最高神が全力で施した封印が一つ目で、全てのスペックが半分ぐらいに落ちている。

『七苦の封印術』により残りの49%が封印されている。

名の通り七つの苦しみを与えられる封印術。これで8つ全てです。

プライド
傲慢…常に身体に激痛が走る。動けば動くほど痛みは強くなる。

ラスト
色欲…1日ごとに全身の神経がランダムで入れ替えられる。

グラマー
暴食…エネルギーの消費量が多くなる。

エンヴィー
嫉妬…自分自身だけにかかる重力が1000倍になる。

グリード
強欲…魔力、それに連なる異能の力の素の量と質が10分の1になる。

スロウス
怠惰…身体能力が10分の1になる。

ラース
憤怒…魔力、それに連なる異能の力のコントロールが圧倒的にやりづらくなる。

オリキャラ設定（後書き）

はい。チートになりました。

まあ、最初っからチートにするつもりでいたんですけどね。
今後ともよろしく願います。

学園都市統括理事長直々のお誘い（前書き）

今回はすごく短いです。

学園都市統括理事長直々のお誘い

カーカスはある男と電話を通じて話していた。

学園都市統括理事長なんて仰々しい名を掲げているその男の名はアレイスター・クロウリー。

『明後日、そこにきてくれないか？』

「別に良いが、なんでだ？」

アレイスターは少し溜めてから、

『ひ・み・つ』

「キモチワルッ！！！」

『そんな強く言わなくても（泣）』

アハハ、と笑ってから言う。

「だってキモいんだもん（笑）」

『鬱だ…死のう』

「死んどけっ」

『ヒドッ！？』

こんな会話をしていた。

- - - - - 2日後 - - - - -

カーカスは指定された地下闘技場のような所に居た。

さつきから明らかにお偉いさんだったり、目が逝っちゃってる科学者さんとかが目の前を通ってる。

大丈夫か？そんな風に思い思わず頭を抱えたときに寄りかかっていた壁から紙がハラリと落ちた。

画びょうでもとれたんだろ。なんて思いながら壁に貼りなおす。

にしてもイベントの名前が物騒だ。『学園都市レベル5序列決定戦』

なんて。

少し気になったので読んでみた。すると総当たりでやるそうだと。そして下の方に目をすべらせると参戦者表が書いてある。それを見た。

……えーっと。何か書いてあるはずのないものが書かれているな。参戦者表の一番下の欄に「現序列第0位：御剣神哉」の文字。

ワオ。こういうことだったのか。アレイスターには後でOHA NA SHIだな。

その時寒気に襲われたアレイスターが居たらしい。

『それではああ！みなさんお待ちかね！レベル5序列決定戦の始まりです！！』

司会者が半ば叫びながら言う。

『まずは第一回戦！第7位、削板軍覇vs第6位、匿名希望さん』
…どうやら本名は言えない事情があるらしいな。容姿も怪しいし。

180cm並みの高身長に顔には白の包帯を片目と頭に巻いている。ピアスをつけていて包帯から青い髪がはみ出てる。まあ！なんて怪しいでしょう！！

『fight！！』

その声とともに削板が技を出す。

「根性だ！すごいパーンチ！！」

衝撃波のような物が飛んでくる。匿名希望さんは関西弁でこう返す。

「なんやそれ！？」

しかしそういいながら音速で間合いを詰める。

「勘忍な。あんま体力使いたくないんや。加速ッ！」

そのまま鳩尾に拳が入る。亜音速で。

どうやら根性ではどうにもできなかったようで、そのまま倒れる。

『勝者！匿名希望！！』

司会者が高らかに宣言する。

科学者、並びにお偉いさんが沸く。

『次は!』

そう言いながらくじを二枚引く。

『第4位、麦野沈利vs……おお!なんと!ここに来ました!』
何が?

『噂だけがひとり歩きして実際は居ないんじゃないか?と言われた男!』

まさか!あの!

『第0位、御剣神哉!……!』

オレですかああ!! ヤダ、コワイヨ。デタクナイヨ。なの
で!!

『この試合!棄権させてもらいます!』

『棄権は認められておりません!』

『試合としてどうかと思いますよ!?それ!』

すると、麦野さんと思われしき人が居た。

『ゴタクはいいからさっさと始めるぞ。第0位!これで勝てばあ
たしが第0位だからねえ』

いいですよ。第0位とか要らないですから。いや、ホントに。

というか、トーナメントだったらソッコーで負けてお暇できるん
ですけど…。

総当たりじゃあ意味無いよなあ。ふむ、アレイスターも考えたな。

まあいい。

やると決まれば普通に勝ちますか。そっちのほうの手っ取り早いし。

『fight!』

『消し飛ばえ!』

開始と同時に直径2mはある巨大レーザーを撃って来た。マジで消
し飛びますよ。コレ。

ドオォーン!!!

爆発時の風で砂煙が舞い上がる。

「あらら？ ホントに消しとんじやったかな〜ん」

麦野は確かな手ごたえを感じた。そして煙が晴れる。そこには…

「う〜ん、そうですね。会心の一撃、しかしノーダメ！！」みた
いな感じですかね？」

最強の能力者が傷一つなく悠然と立っていた。

「嘘でしょ！？」

「ホントですが。何か？」

何食わぬ顔で言ってやった。

「あれはあたしの最高出力よ！？ あれを喰らって無傷なんて…っ！
！」

まあ、ホントの事を言えば最初っから溜めてたことに気付いてたんですけどね。

止めちゃったなら面白くないですし、大きな失敗をする前にここで心を折つとけばそれを踏み台にして上へ行けるでしょうから。

「僕的能力を知らないからですよ」

「知ってるわよ！ 身体能力強化なんですよ」

「はい。ただ、普通のとは少し違いますけどね」

「違う？」

麦野は怪訝そうに眉をひそめる。

「僕的能力は『フリーカスタマイズ完全改造』といって、自分の体を改造する能力ですよ。今のはただあなたの攻撃に耐えられるようにしただけです」

「バケモン真正銘の最強ね…。降参よ。敵う訳がない」

カーカスは自嘲的な笑みを浮かべながら、バケモン、か……。と言う

『勝者、御剣神哉ああ！！！！』

会場が一気に沸いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3958w/>

とある魔術と科学の交差

2011年11月13日21時03分発行